

日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制のモデル化に向けて—エジプトにおける特別活動（Tokkatsu）の展開を手掛かりに—

○天野 幸輔（名古屋学院大学）、鈴木 純一郎（東京・貝取小学校）

1 はじめに

日本人学校では、総合的な学習の時間等を用いて、国際理解教育や現地理解教育の枠組みで、様々な校種の児童生徒との交流活動を行っている。公立学校や市立学校の同じ学年・学齢の児童生徒との交流に限らず、例えば日本での特別支援学校やインターナショナルスクールの見学や交流などもある。さらに教職員間でも様々なレベルでの交流が、継続的に行われている。現地の教師と対話する中で、教育システムの違いはもちろんのこと、教師の社会的な地位の違いや学校がどのような価値に基づいて運営されているのか、責任の範囲、保護者との関係性など、国内にとどまっているとごく当たり前として疑いもしないことの意義に改めて出合うことができる。

その中でエジプトでは、日本の教育課程である特別活動が、エジプト日本学校(2018年35校が開校。以下、EJSと表記)を中心として広がっている。日本側、エジプト側とも様々なシステムを駆使して、実践が広がっている。とりわけ2023年に学級活動に関する合同授業研究会を実施した、カイロ日本人学校(以下、CJSと表記)の活動は、「日本人学校を拠点とする、よりよい授業の在り方を学び合う国際教師集団の形成」とでも述べるべきものである。本発表は、2つの実践について報告する。

2 実践

- (1) Tokkatsu (学級活動を含む特別活動) の公開授業および意見交換会：令和5年9月18日、CJSにおいて、EJS教員10名が参加して実施された。さらに研究者10人が日本からオンラインで参加した。CJS教員と外部講師(現地企業に所属する日本人職員)による実践が公開された。小学部1・2年生6名を対象として学級活動(2)、題材「ばい菌バイバイ！手洗い名人になろう」であった。EJS教員の意欲は高く、終了後の振り返りの研修では、多くの意見が出され、活発な学びの場となった。
- (2) 学級活動(1)の模擬学級会を含む交流活動：令和5年12月28日、EJS一校においてEJS教員、CJS教員、日本人教員・研究者で模擬学級会と、そこで決まったレクリエーションの実体験による交流が行われた。参加者は児童役として、その場ででき、全員が参加して楽しめるレクリエーションを2つ決める学級会を行った。司会者、黒板係、司会者は日本側が担当した。ムスリムの宗教上の禁忌に配慮しながら議論し、「発信地」「じゃんけん列車」に決まり、参加者全員で楽しむことができた。

3 成果と今後の課題

- (1) 日本の教育課程のよりよい実践の在り方の模索を中心とする交流の実現：子どもにとってよりよい授業実践を志す教員同士ゆえの交流が実現したうえに、お互いその価値を認める日本の教育課程である特別活動（Tokkatsu）を中心にすすることができた。日本の教育課程が世界に発信され始めている中であっても、特筆に値すると考えられる。
 - (2) 日本人教員とエジプト人教員の学びの質の違いの明確化：この点を分析することで、よりよい研修の在り方の模索につながり、継続的かつお互いに学び合える新しい交流を提案できると考えられる。CJSのみの実践にとどめることなく、世界の日本人学校へのモデル化を図ることができる。
 - (3) 日本の教育課程を伝えることの意義の問い直し：日本の教育課程が世界に発信される点で、日本側は教える立場のみにとどまってよいのだろうか。例えば、この多くのエジプト人教員の「熱心に、謙虚に学ぶ姿勢」といった態度レベルにとどまっては、教える者・教えられる者の関係性を脱することができない交流になってしまうだろう。学級会に臨むエジプト人児童の発言や議論の特徴や、エジプト人教師の指導の方法の根底にある価値観などを知ることによって、ある意味で当然になっている授業や指導を振り返り、気づきを得るような、真の意味で学び合えるような交流に至れるのではないだろうか。
- ※本発表は、令和5年度文部科学省「日本型教育の海外展開（EDU-Portニッポン）」調査研究「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」の助成を受けている。また日本特別活動学会2023年度重点課題プロジェクト「グローバル・スタンダードとしての日本型教育モデルの開発—Tokkatsuの海外展開の分析—」の助成を受けた。